双子入り
300円弁当
姉妹どんぶり
基本7枚（差分合計400枚）

「こっ、これでよろしいですの？」
初めて握る、男性性器。
人体の一部としてはまずいくないかと思えるほどの熱量、
鼻にツンとくる刺激臭、そして
（固いのに柔らかくもありますわ）
あまり体験したことのない感触。
棹はゆっくりとそれを扱く。

ドクッ

最近立て続けに起こっている
女性狼集団レイプ事件。
その主犯が連絡を入れてきたのは今朝。
すべてを終わらせる代わり。
その条件がこれだった。

ドクッ

しゃらしゃら

主犯の男はヘラクレスの棍棒。
かつて自分と鏡に地獄を見せた男。
「なぁ、キョウ。君はこの街でも人気者なんだな。」
かつて惹かれた笑み。でも今はそれが醜く映る。
「ちょっと呼びかけたら、こんなにも集まってくれたよ。」

ひっ

ドク

学校やスーパーで見かけたことがある男たち。
それらが今、ゲスな笑みを浮かべながら
自分たちに下半身を押し付けてくる。

ぎゅっ

ビクッ

ドクッ

ドクッ

麗人・・・
魔女、
梗はこのふざけた宴に巻き込まれた
狼達を思い浮かべる。
(皆さんごめんなさい)

「イクぞ、顔をこっちに向けろっ」
「えっ」

驚くほど大量の、粘り気が強く、白いが濃い、熱いものが梗の顔をパックするように浴びせられる。精液。

「ハァハァ・・・タップリと出たぜェ」

くさ・・・!

は!

は!

は!

は!

は!

ビク・・・!

知識としては知っているものの実際に見るのは、初めてだった。

(こんな体験はもっと素敵なときに素敵な殿方としたかったですわ)

耳年増でいずれ来る経験を夢見ていた少女。

今はもう夢は夢と諦めた。

ビク

「おいおい、キョウ。一人相手したぐらいで呆けるなよ。妹の方を見習えよな。」

性器をむき出しにされ、両の手で男のものをコスる少女。

「…鏡」

視線を向けると双子の妹、
鏡が一度に何人も相手にしていた。
気遣いのできる妹のこと、
梗に少しでも負担がかからないように、
文字通り体を張っているのだろう。

普段出来る限りポーカーフェイスでいる彼女だが
さすがに今回ばかりは
表情を隠すに隠しきれていない。
しかし、ただ黙って男たちに奉仕を続ける。

「いけませんわ、鏡。
これは私たち二人が招いてしまったこと。
鏡一人にこの重荷を
背負わせるわけには行きませんわ」

「俺さ、前から副会長の事が好きだったんだよ。
毎日隠し撮り写真でオナッてるぐらいに。
それがこんな所でこんなふうに、
御奉仕してもらえるなんて。」

「ぼ…ぼくも…きょうたんの事
愛してるんだよ…分かるだろ、
このおチンチン。きょうたんのせいで
こんなにはれちゃってるんだ。」

「俺も」

「僕も」

「俺のほうが」

「これが鏡のオマンコっ」

「ケツ穴ヒクヒクしてる」

「大人気だな、キョウ。
クール美人のご奉仕手コキか。」

「副会長ッ」
「きょうたんッ」
周囲360度から放出される精液。
元々白い鏡の肌が白濁液でより白く染められる。
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
う…
す…
ドロ…
「美人はどんな姿でも美人だな。
しかしチコキもいいけど、そろそろこっちも使わないと
何時まで経っても終わらないぜ」

「あ～きもちい～。」
処女は簡単に奪われた。
初めての男は名前も知らない、
ただ同じ学校の生徒。

好きだ、愛してると
口では言っているが
結局のところ・・・

性欲処理の相手が欲しい

ただし可愛ければ
より可愛い方がいい。
それが鏡だっただけ。

はぁ
はぁ
くぱ
くぱ
ずっ
ずちゅっ
ずっ
ずん
ずん

「きょうたん、ぼくの子供孕んでっ」
避妊なんてまったく考えていない、
容赦無く、
膣内に吐き出される精液。
ひぁ
くぅ…
びゅ
びゅっ
どくっ
どくっ
びゅくっ
妊娠、出産、子供が生まれる。
「孕んで」と簡単に言っているが、
それはなにか考えがあってのことではなく、
単純に相手を征服したいための言葉だった。

（姉さんの妄想で、今回と似たようなシチュエーションを聞いたことがありますが・・・）
ろくに準備もなしに挿入された秘所は炎症を起こしているのか熱く腫れている。
ぐぷ
ぐぷ
全身に出された精液の臭いでさっきからずっと吐き気が止まらない。
（こんな事を皆さんはされていたのでしょうか）
くぷ!
ん"ぐ・・・!

（最初よりも人数が増えていますわ・・・）
全身を使い男たちへの奉仕を続ける梗。

しゅる しゅる

男たちの壁で見えないが
おそらく鏡も同じような
状況だろう。

気力も体力もすり減っていく。
時々犯されながら
意識が飛ぶこともある。

あっ

そのまま眠ってしまえば
どれだけ楽だろう。

でも・・・

（わたくしが落ちてしまうと
残された鏡が1人苦しむ事になりますわ）

しゅっ しゅっ

ずっ ずっ
ずっ ずっ

ぎゅっ
ぎゅっ
ぎゅっ
おおおお
ぎゅっ
ぎゅっ
ぎゅっ

それから更に何時間も犯された。
生徒会長と副会長であり、
狼としても有名な梗と鏡・・・オルトロス。
彼女らを犯したい相手は
次から次へと現れ、一度終わった者も
終わらない性欲で何度も梗を貫き犯す。
人気がある二人だからこそ、
この宴に終わりは来なかった。
ヘラクレスの棍棒にいたっては
梗が終われば鏡に、
鏡が終われば梗に・・・と
休むこと無く犯し続けていた。
ぶっ
ぶっ
ぶっ
ぶっ
ぶっ
ぶっ

「7時間ぶりのご対面だよ、キョウ」
終わる、と無く犯され続けた姉妹。

意識は混濁し、
躰は少しでも楽になるために、
すべてを
受け入れるようになっていた。

躰は汗と
精液の臭いがこびりつき

顔は涎と精液まみれ

ヒク
ヒクッ
お…
ん…
ドキ
ドキ
ベロ
ベロ
ベロ
ベロ
い…
あはっ!
「蕩けるようなイイ表情だ」

「ああああああああああああああっっっ」

「うん、いい声で啼く」

すでに二人の膣内は愛液と精液で溢れており

また犯され続けた結果膣壁の伸縮は伸びきった状態

締りはなくなっていたがそれはそれでまた違った感触となっていた。

「まるでユル系オナホにローションを入れまくった状態だなこれはこれで」

ぢゅぢゅぶっ

ぢゅぢゅぶっ

「イケよ、キョウ。
そしてお互いの顔を見るんだ。
まったく同じイキ顔を見ろ。」

「どれだけ自分たちが
悦んでいるか気づけっ」

「自分がどんな
だらしない顔をしているか」

ぐぐっ

ぴくっ

あっ

あぁ

あぁ

あぁ

あぁ

ぷるぷる

「姉さん…」
ププ
「鏡…」
ゴポ
ゴポ

事件はあっけないほど簡単に終わった。
多くの人間が出入りしていれば
それだけ人の目につきやすく
足もつきやすい。
ごくごく当然の結果だった。
ヘラクレスの棍棒も捕まり、
オルトロスの二人も解放された。
あ～
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ

ただ、あのような事件が
彼女らに何も刺を残さないはずもなく・・・
ぐっ
んぐ
んは
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ
「姉さん、まだですか？」
「ひょっほ・・・ふぁってぇ・・・」

「あぁん、もう。何故あなたはおチンチンを二本持っていないのかしら！わたくしたちは二人なのですから、おチンチンも二本あるべきなのです。」
「姉さん、それはさすがに無茶すぎです」
ぐちゅっ ぐちゅぐ
あん！
んん！
んっ！
何時間も犯しに犯され続けた二人は結果、いくつかの扉が開いてしまった。

「・・・！姉さん、出ます」
ひん。
「さすがだわ、鏡。おチンチンは一本しか無くても精液は二人でかけることが出来る」
あ。
つぐ。
あは。
んあ。
どくっ
どくっ
「んっ・・・あっつ・・・」
「この臭い・・・あぁぁぁん、これだけでイッてしまいますわ！」
んんん。
ぴん。
ぴん。
「私も・・・この臭いで・・・あうっ」

はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
あれから、彼女たちは精液を切らした日は一日もない。
ただし精液を補充するときは必ず二人で
ふたりっしょでオルトロスとして